

広島大学総合科学部報



“飛 翔”

No. 34

1988年3月22日



広島大学総合科学部広報委員会

'88 総科カレンダー(後期)

<10月>

○成績発表

全優取れなかったからといって悔んでいては先輩達がかわいそうです。皆悩んで大きくなりました。1年生で20単位取れなかった人、後期はがんばりましょう。

○後期聴講受付(15日～28日)

手順は前期とほぼ同じです。冬の1コマはキツイゾ!

<11月>

○大学祭

食べて、踊って、映画観て、3日間のお祭り騒ぎ。これでいいのか大学祭という声も聞こえますが、とにかく大学最大のイベントです。

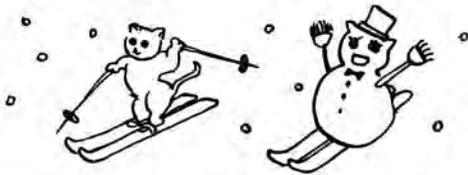
○秋季ソフトボール大会

教官と事務の方々のチームも加わり、熱戦が繰りひろげられます。日頃の思いを白球に込めて晴らしましょう。

<12月>

○冬休み(12月21日～1月7日)

クリスマス会、忘年会と何かと忙しい季節です。体に気をつけて。年が明けると、皆の顔がふくらして見えるのは気のせい?!



<1月>

○コースガイダンス

2月の最終志望コース提出のための、1年生対象の最後のガイダンスです。文転、理転する人もいれば、初志貫徹する人もいます。よく考えて決定しましょう。

○4年生卒論締め切り

この時期、4年生には近づかない方がいいそうです。

<2月>

○後期試験

勉学に打ち込みましょう。成績発表は4月です。

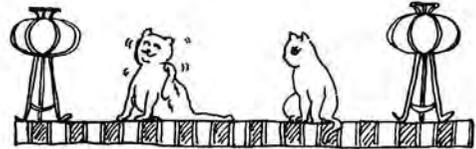
<3月>

○卒業式

卒業生の皆さんお元気で。いろいろお世話になりました。はたーるの光、窓の雪……。

○春休み(3月1日～4月8日)

あっという間の一年でした。この一年を振り返り、来年度への充電期間にしましょう。それでは4月までさようなら。



[その他の行事]

○文化バス(特別企画)

一般教育の学生対象ですが、誰でも参加できます。詳細は厚生補導係まで。夏休み直前と10月下旬の2回の予定。

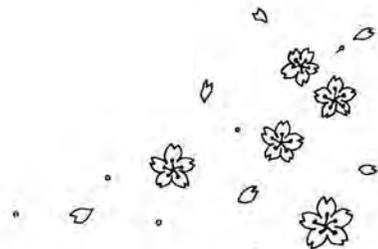
○フェニックス駅伝(12月4日が予定日)

体育会主催。総科チームを作って参加してみたいかが?

○1年生合宿研修(9月の初旬を予定)

昨年は1泊2日で行われました。自分の進路、特にコース選択で迷っている人には大きな助けになるでしょう。教官と仲よくなるチャンスでもあります。

(文責 矢野 泉)



目 次

学部長挨拶	天野 實	1
特集・総合科目		2
総合科目の現状	編集部	3
なつかしの総合科目	編集部	7
総合科目史概論	編集部	7
他大学の総合科目	編集部	9
総合科目の新たな展開のために	好村 滋洋	11
退官の言葉 大内 侃 教官		14
" 小此木 久一郎 教官		14
「なぜ資格をとるのか」	編集部	15
退官の言葉 田淵 實貴男 教官		18
当世・コース選択事情	編集部	19
あきらめてませんか? 忘れ物	編集部	21
特別研究論文題目紹介		23
就職委員会報告	就職委員会	28
就職体験記	妹尾 達也	30
"	山本 敬子	30
岡本先生の思い出	小林 文男	31
退官の言葉 山田 浩 教官		34
シリーズ数字 4から7へ	編集部	35
学部の記録		36
飛翔箱		
大学・大学生と人生雑感	海堀 正博	37
第一印象—広島—	向井 かすみ	37
推薦状の中の一言「リジリエント」	田村 一郎	38
インドへ	松熊 訓子	38
投稿のお願い	編集部	40
33号のお詫びと訂正	編集部	40
街の総科	編集部	41
編集後記		42

卒業生の諸君へ

総合科学部長 天野 實



卒業生諸君、卒業おめでとう。
諸君が広島大学にある多くの学部の中で総合科学部を選んで入学した理由は何であったのだろうか。我々の総合科学部が他の学部と異なる所は、従来の日本の大学教育が専門指向型であり、専門分野の壁が厚く隣接分野への視野を拡げる努力に欠けていたのに対し、新しいタイプの教育研究を積極的に行っているという点である。云い換えると核となる専門分野を持ちながら裾野の広い教育研究をおこなう学際的な学部であるということだ。

総合科学部を今卒業する諸君はこのような我々の学部の良い所を存分に経験したであろうか。一抹の不安を感じている。しかし大学生活の4年間は長い人生のほんの一時期にすぎない。特に若いエネルギーに満ちた青春の時期に色々な他の大学・学部に入学生とは異質な経験をしたことは必ずや諸君の将来に生きてくるものと確信している。先日も或る会社の人事部の人が来られての話に、総合科学部の卒業生は何か新しい企画に対して物怖じしないでやってくれる点が非常に良いと強調しておられた。我々の目指したことが学生諸君に伝わっているのだなあと感じた次第である。広く浅く学んだということは欠点と思えるかもしれないが、それがかえて社会に出て長所になるのだと確信し自信をもって頑張っている。今からの社会はきっと多様化していくに違いない。このような現代社会で活躍していく若者は何事にも尻込みせずのびのびと自分を出して生活していかなければならない。だからこそ何か困ったことに出会った時には母校である総合科学部を思い出して指導教官なり関係のある先生方に相談しに来てほしい。必ず道は開けると思う。

またこの学部のもう一つの特徴は外国語に強い学生の教育である。つまり他国の文化に接する手段としての語学に強くなるようにカリキュラムが組まれている点である。一年次ですでに外国語特別演習を取っているはずだが大切なことは言葉を流暢に話すことよりも話す内容である。発音もさることながら外国人と会話をし、自分の言いたいことをいかにし

て伝えるか、これは本当に難しいことである。しかし将来日本人には今迄とは比較にならない程の国際的人間が求められるであろう。自分の国のことを知り、他の国のことをあるがままに理解することが我々日本人に必要なことである。このような気持になっではじめて眞の国際交流ができるものである。ローマは一日にして成らずのたとえにある如く、語学の上達にはたゆまざる努力が必要であろう。諸君の今からの人生はまだまだ長い。ゆっくりでよいから長い期間努力を続けてほしい。何かをじっくりと十年間続けて努力した人には並大抵で追いつけるものではない。何でもいい、これがやりたいと思うものを見つけてこつこつと続けてほしい。

最後にもう一つつけ加えたいのは今年一年の間に総合科学部は未曾有の大事件を起したことである。何が原因だったのか、何故こんなことになったのか。諸君は一人一人自分なりに考え何が原因だったか結論を出していることだろう。私なりに考えての結論として原因の一つが総合科学部構成員お互いの意思の疎通を欠いたことにあると思えてならない。9月5日に行われた追悼の会で学生代表の藤本さんは次の様に述べている。「岡本先生は『自分にできる限りのことはするから、何かいい考えがあればいつでも言ってきたさい』と学生に繰返し繰返し話しておられた。」このような姿勢で生活しておられた岡本先生が何故こんなことになったのだろうか。悔やまれてしかたがない。どうか諸君、今後の長い人生の中で悩みごとを率直に話し合える親友を持ちなさい。自分が素直でなければ友は得られない。

無事に4年間の学業を終えられたのは自分一人の力ではなく御両親はじめ多くの人々のおかげである。感謝の気持を忘れず今後とも一層の精進をされんことを切望する。

「総合科目」という言葉は、総合科学部生にとって少しばかり気になる響きを持っている。「総合科」の三文字を共有しているから、などということではなく、何処か総合科学部が指向してきた学問の姿と重なり合っているような、そんな感じがあるからかもしれない。

総合科学部について、これまでいろいろな人が実に様々な見解を示してきたように、総合科目についても多くの議論が繰り返されてきた。「専門的学問領域にとらわれない広い領域についての概観、あるいは特定の問題に対するさまざまな学問領域からの考察などによって総合的な知見を養うことを目的（62年度講義概要）」とする総合科目だが、いざそれを実現するとなると、かなりの困難を伴う。どのようなテーマを設定し、それをどのような内容で構成するか。どのような講義形態が望ましいのか。評価の方法は……。たとえ、その1つ1つの問題点をクリアしたとしても、総合科目の雛形などあろう筈もなく、すぐにまた次の問題が浮かび上がってくる。

今回、飛翔で総合科目を取り上げたのには、63年度をメドに広大の総合科目の改革が進められているという背景も確かにある。だが、学生編集委員の発想としては、総合科学部生が一般教育科目として必ず履修しなければならないこの科目、受けてはみたが結局つかみどころがなくて……と通り過ぎてしまうのは、少々惜しいのではなかろうか、というあたりから始まっている。

学生の中には、総合科目の“ファン”がいる。他の講義とは異なる総合科目のスタイルに「これだ！」とばかりに感銘(?)し、より多くを吸収しようとするタイプ、と言えようか。逆に、とりとめがないとさえ思われる講義に困惑し、もっと一貫性のあるわかり易い総合科目を望んでいる学生もいる。

教官の方も、いい総合科目を創り上げるにはどうすればいいか、その問題点や解決法については幾度も議論を重ねている。しかし、実際にそれを行うのは容易でないということで、これといった決め手に欠けた状況が続いている。ご存知の通り、全ての教官が総合科目を担当しているわけではないから、共通の関心事になりにくい、ということもあるのだろう。

教官も学生も、「もっと他にやりようがある筈だ」と思っている。「総合科目はもっと活気があって、そして面白くてもいい」。

それぞれが思い描く「総合科目」は、実に多種多様なものであろう。一度は必ず関わることになる総合科目——以下の記事が、上手な総合科目とのつきあい方と考えるきっかけになれば、と思う。

総合科目の現状

編集部

現在（'88年2月）開講されている総合科目はどんな内容で、どのような目的で運営されているのか、学生はどのような意識で受講しているのか。総合科目の姿をとらえる際に、避けては通れない分析であろう。今回、責任指導教官の方々、実際に出席していた学生たちにアンケートをお願いした。以下はその分析である。

（各講義題目ごとにまとめてあり、先に教官側の意見、その後に学生側の意見となっています。順序は学生便覧の順序に従いました。） 注：◎教官 ①学生

ヨーロッパとは何か

◎この講義は、ヨーロッパの近代という歴史的流れの中で、人間の問題を様々な側面からとらえることを狙いとしている。国際化が謳われる昨今、真の国際人に問われるのは、断片的な知識ではなく、流れとしてとらえられた歴史と文化の理解なのである。ヨーロッパの理念を共通のテーマとし、各々の講義では色々な側面からダイナミックな問題提起を行っている。対象とする学生は特になく、あくまでも一般教育の一環として行われている。ただ、試験の問題型式上（2問選択で、最低2回の授業に出席すれば、解答可能）、教官サイドの意図が十分に伝わっているかどうか、問題となる場所である。

①8割方埋まった205教室で、学生は比較的静かに授業を受ける。教官はいつも熱弁。前期は「ヨーロッパ人とは」、後期は「ヨーロッパと日本」のテーマの下に話が進むが、教官間の連続性はあまりみられないように思える。講義によっては時間内に収まり切れず、表面をなぞるだけになり物足りないことも。試験（62前）は、受けた授業のうち2つを選択し論述するもの。評価が甘いというウワサもあるが……。もっと広く東・北・南欧も含めた話も聞きたい。また先生方には、自分以外の教官がどんな話をしたか、せめて把握しておいて欲しいと思う。

戦争と平和に関する総合的考察

◎この講義の狙いを一言で言うと、“戦争体験の若い世代への継承”である。これも、対象とする学生は特になく、教官側はより多くの学生が幅広く興味を抱いてくれることを希望しているが、学生全体からみればまだ不十分であるのが現状である。講義内容は、バラエティに富んでいるが、まとまりに欠けるという相矛盾する事情がある。地理的要因もあって理想とする内容を網羅できるだけのスタッフが不十分であり、又、多くの先生方との意思の疎通が困難であるという状況である。問題点としては、学生と教官の間に世代の隔りがあるために、両者の関心にずれがあるのではないかと、学生参加をどういう形でとり入れるかが、挙げられるが、後者の手段として現在レポートの提出を採用しているが今後の課題となる問題であろう。

①コンスタントに出席しているのは4、50人か。「戦争と平和」について、教官が個別のテーマを担当している。全体としての統一性に欠ける感じはあるが、戦争と平和という問題が非常に多面的なものである以上、仕方のないことかもしれない。しかし、テーマ毎に2回の講義では表層だけに留まりがちなので、もう少し時間を増やしてもいいのではないかと。試験（62前）は、レポートの形式をとっていた。だが課されるレポートの量が多いので、皆苦勞したようである。

情報化時代における産業・技術・社会

⑩そもそも、大学における教育というものは、社会的ニーズから生起し、それが大学において研究され大学教育に組み込まれていくものであるが、この科目はその典型とも言える。この講義は、広大の「公開講座」を元にしており、特に対象とする学生はこのテーマに好奇心のある学生である。スタッフは学内だけではカバーしきれないので、民間からも採用しているが、通年で講義を行えるだけのスタッフを揃えることが困難であるのが現状である。又、好奇心のある学生が少ないのも、教官側にとっては、少し寂しい気がする点である。

⑪図表や TV など視覚に訴える資料が多いので、漠然とした印象を与えがちな講義がわかりやすいものとなっている。資料の充実は、学生にもウケている。情報化時代という大きなテーマを根底に全体を包括、毎週の授業は、その中で1つ1つの問題をピックアップしている感じ。一般企業から講師が来られたりもするので興味深いが、専門用語の多発についていけない学生も。試験(62前)は、各講義の主題をどれか選び、情報化時代を自分がいかに生きるかを記述する、学生には有難いものだった。刻々と変化する現代社会に対応した、常に新鮮な講義であった欲しい。

生命科学

⑫この講義は、up-to-dateかつトップクラスの研究内容について、わかりやすく講義することを狙いとしている。内容は、生命現象ということで終始一貫しているが、その根幹は様々な観点から取り上げられており、果ては哲学、世界観、人間観といった社会現象レベルへも言及している。特に対象としているのは、将来生命科学を志そうとする学生であるが、専門に必要な基礎的知識を教えるのではなく、将来どのスタート台に立つかという、やがて興味の対象となるテーマを提供している。宗岡教授、曰く「一年生のうちに生命科学を聞かなかった者は、絶対に損をする」

⑬独語の裏番組になってしまい特別に再放送、というわけで週2コマ。出席の紙はまわるし、教官毎にレポート提出あり。試験は持込み可、問題の選択が可能なので、真面目に聴講するのが決め手か。授業中の学生は静かなものである。内容は時々難解だったりするのだが、先生方の意気込みが伝わってきて、学生にも緊張感が生まれる。各教官の自己紹介も楽しみの1つ。1つの講義で多くの教官に出会えるので得した気分。ただ、体系的に進めにくいのが難点。しかし、4単位はもったいないとも思ったりして。

人間と環境

この講義の狙いは「環境とは何か」という問題を多角的に考察することである。前期は地球規模で、後期は1人の人間を中心とした、社会、環境との関わり合いという視点から、このテーマを捕えている。この科目では、決して一分野だけでは理解し得ないこの問題について、様々な視点から述べられる講義内容を、テーマに沿ってまとめあげていくのは学生自身なのである。対象としている学生は文理を問わないが、実際は、他学部の2年生が多い。問題点としては、講義自体は通年で理解できる構成となっているのだが、学生は半期でやめてしまうこと、スタッフ間の意志の疎通が困難であることなどが、挙げられる。

前期は人が多くて大変だったが、後期は落ち着いた。いろんな視点から環境を論じるということで、講義全体を通しての統一性はないが、それでいいと思う。1、2回では深い話が聞けないので、一人の先生の時間がもっと増えてもいい。しかし同時に、多くの先生の話聞き、様々な視点から環境を考えられるのも、この科目の利点だ。試験(62前)は、何を持込んでもよく、行われた講義の中から3つを選び論ぜよ、というもの。ノートを取ってれば大丈夫なのだろうが、落とされた人も多かったようで…。

創造とは何か

この科目では「大学で何をすればよいか、わからない」という学生が潜在的に多いのではないかと懸念より学生に学問、大学についてのモチベーションをもたせることを狙いとしている。このため、対象とする学生は新入生である。内容は特定の専門分野に偏らず、多種多様な方法で「創造」というテーマにアプローチしている。専門基礎や一部の学科を除いて、一般教育は、創造力の養成にあると考え、この科目に、生涯教育のベースとしての意義を見出している為、評価は困難である。

出席がとられるので8割程度の学生は出ているようだが、態度はそんなに真面目でなく「とりあえず」聞いている感じ。毎回変わる教官が「創造」について異なる角度から論じる。テーマ自体は非常に魅力的なので、各教官の専門は生かして、さらに全体を通してのまとまりがあればいいのでは? 試験(62前)はノート持込みで、自分の考えていた創造と違う「創造」を提起した講義について書くものだった。前期は出席もとらなかつたから、一度も出てなくても「優」がとれた??

昭和62年度総合科目聴講者数

授業科目(講義題目)	単位数	実施責任者	期間	受講者数	備考
ヨーロッパとは何か	各期2 計4	戸田	前期 後期	118 114	
戦争と平和に関する総合的考察	各期2 計4	山田 (浩)	前期 後期	154 69	
情報化時代における産業・技術・社会	2	舟場	前期 後期	106 49	一期間にて完了
現代の物質観	各期2 計4	豊島	前期 後期	80 46	
ミクロの科学	各期2 計4	重中	前期 後期	110 67	
創造とは何か	各期2 計4	瀬川	前期 後期	231 255	
人間と環境	各期2 計4	根平	前期 後期	369 162	
生命科学	各期2 計4	宗岡	前期 後期	101 51 22	
国際社会—過去・現在・未来	2	清水(明) (参加講師)	前期	76 (13)	合宿共同授業(集中) (学生便覧を参照)

※合宿共同授業の受講者は参加8大学の総数で、()内は広島大学の参加学生数を示す。

ミクロの科学

この講義は、自然界の微小レベルでのサイエンスについてまとめて講義することを狙いとしており、開講に当たっては、電子顕微鏡研究会の先生方の要求もあった。内容は、研究手段が電子顕微鏡ということで一貫しているが、その対象は多岐に亘る。興味のある学生を対象としており、総科では専門とのつながりといったものを考えていないが、他学部の教官の中には“専門の基礎”としてとらえている方もおられる。実際、当初の目的は達成されており、受講者数も学生の反応も予想通りであった、全体的に学生がおとなしいということが、教官側の不満といえは不満である。

現代の物質観

㊦この講義では、一般科目で得た基礎知識が、最先端の研究内容にどの程度役立つのかを、内容は高度であるが、わかりやすく講義することを狙いとしている。クォークから生命体までというつながりの中で様々なレベルでの物質を対象としており、それぞれの分野における最先端の研究に携わっている教官が講義を行っている。特に対象としている学生は、理系を志す1、2年生であるが、講義内容は専門以上に高度なものであって、学部での専門には直接つながらない。しかしその分野では、何が狙われているかを示し、学生が将来の研究テーマの決定する際のきっかけを提供している。問題点として、総合科目数の増加と指定科目により時間割編成上、この科目が対象としている学生が、聴講できないという点があげられる。

㊧全講義を通して、現代の自然科学の物質観というものが浮び上がってくる。OHP などを使用してのわかりやすい講義。教官が2、3時間ごとに交替するためそれぞれについて簡単にしか話されないのは残念だと思う。試験は各教官ごとの出題を2題選択解答するものだが、持込み可であるから、授業中にきちんとノートを取っておけば問題ない。通年にして、前・後期で重複するものをなくし、もっと幅広い分野（物理、化学、生物、医学）へと対象を拡げて欲しい。

国際社会—過去、現在、未来

㊦この講義の狙いは、授業を通じての学生と教官の交流である。夏休みの実質3日間、大山において、1日3コマの授業あり、屋外での自然観察あり、夜は討論会あり、コンパあり、かなり面白味のある科目である。スタッフは“国際社会”というテーマに関連して、各大学から最低1人以上選出され、数回にわたる事前の打合せが行われており、講義内容もかなり充実している。ただ、3日間という時間的制約がある為、学生にとっては息抜きの時間がないというスケジュール上の問題がある。

㊧普通の大学の講義とは違う4泊5日の集中講義。野外活動も入っていて思ったより楽。視聴覚教材等をふんだんに使ってあり、教授も一緒になって真剣に聞いていた。講義の後の質問も多かった。他の大学の学生と一緒に講義を受けたのだが、お互いに刺激し、活発に話し合えたと思う。異和感もなく友達になって、秋休みには同窓会までやって騒いだ。試験ではなく、レポートによる評価であった。

㊦普段見ることの出来ないミクロの世界を、たくさんスライドやビデオで見れるのはなかなか興味深い。さらに、総合科学部だけでなく医学部や工学部の教官の話が聞けるのも有意義だと思う。時折専門的になりすぎるきらいがあるので、例えば文系の人向けの参考文献を紹介するなどして欲しい。今まで知らなかった世界について、いろいろ新しいことを知ることが出来、参考になることも多い。只テーマ毎の持ち時間が少ないので、深い理解に至らないまま次に移ってしまうのが惜しい。試験ではなく、レポートによる評価だが、難しすぎて一筋縄ではいかないことも……。

なつかしの総合科目

編集部

総合科目はどういった科目なのかという問題を、現在受講している一、二年生とは別に、すでに受講し終えて自らの専門分野に足を踏み入れている三年生の立場から眺めてみると、少しは違った側面が表れるのではないだろうか。そこで今回、三年生の各コースの学生に、総合科目についてふり返ってもらった。大半が二年前の受講ということもあって、細部については不明瞭な点もあったが、それだけ逆に強く印象に残った部分だけが表れているといえるのではないだろうか。

○聴講科目数について

第一のポイントとしてあげられるのは、総合科目を二科目以上受講した学生は少数であったという点である。総合科目は四単位以上というラインがあるだけで、一般科目の必要単位を総合科目を余分にとって埋めてもかまわないわけだが、六単位、八単位と取得している人は極めて少なかった。これは、総合科目が、他の一般科目とは少し違った位置にあることを示しているのではないだろうか。どちらかというと、必修科目的な見方をされており、早めに済ませた方がいいと考えていた学生が多いのではないだろうか。

総合科目史概論

1 総合科目以前（昭和20～30年）

第二次大戦後の大学改革。それが総合科目の源である。この改革の大きな柱であった「一般教育」の設置が総合科目を生み出した母体だからだ。

一般教育は英語の General education の訳語である。戦前の高等教育のエリート的・脱俗世的体質を排し、大学を民主化するという至上命令に従って米国から移入された概念であった。その目的は、広汎な視野に立って物事を考えることのできる人間の育成であった。

この目的に従えば、一般教育の総合科目化は必然的なものとなる。しかしそれまでとは全く異質な考え方であるため、理解されるのに時間を要した。理念がつかめないうまま教育が開始された大学では、一

○講義内容について

a 肯定的な感想

この感想は、総合科目の内容が大変役に立ち、現在の専門内容にもつながっている、といったものである。大部分は、理系の要望科目として聴講した人が出した意見だった。講義の内容もかなり専門的で、なかなか難しかったという感想もあったが、それだけに、きちんと勉強した人にはプラス面も大きく、今でもノートを取り出して専門分野の参考にしていくという人もいた。比較的早い時期からコース志望が決まっていたり、自分の問題意識をつかんでいる人にとっては、要望科目として密度の高い講義が大きく役立っており、この点では総合科目といえども他の講義と大きな違いはないのかもしれない。

他にも、「大学内部でなかなか聞けない話が聞けて興味深かった。」という人や、「一つの問題について様々な角度から見人がいるのを実感した。」など、各回で教官が交代する点や学外から教官を招く点を評価する人も多かった。また、「今考えてみると、色々な角度から話を聞くことができたので、自分のしている勉強が、広い学問分野の中のどこに位置しているかを感じることができた気がする。」という人もおり、総合科目にしかない長所を見ることができるのである。

b 否定的な感想

こちらの感想を出した人の、総合科目を選出した

般教育は専門のための基礎教育としか見なされなかった。総合科目の開設は、本来専門教育と同置されるべき一般教育の「復権」を狙ったものだった、とも言えよう。

2 総合科目始動（昭和31～45年）

昭和31年度、お茶の水女子大学において初めて計画的に総合科目が開設された。当時まだ総合科目に関する法的規定がなく、総合コースという名称であったが、人文3・社会2・自然1の計6単位を有する通年の講義で、セミナーが実施されていたのが特徴であった。

昭和39年度、広島大学に総合コースが開設された。国立大学では神戸大（38年度開設）に続いて三番目である。最初の講義題目は「歴史学一般」で、これは人文分野に属する一般教育の1科目として開設された。以後、昭和45年度まで毎年3～4科目が開設

動機は、「自分の取りたい総合科目が他の必修科目と重なって取れなかったから。」というものや、「楽に単位が取れるものを選んだ。」というものであり、選択段階で不満の多い場合には、感想も否定的なものになっている。感想の中味としては、「先生がクルクル変わって、講義全体の統一した流れがつかめなかった。」「一人の先生の持ち時間が限られるため、時間に追われる感じが強くした。」「同じ先生の他の題目の講義と重なる内容が多かった。」など、なかなか厳しいものになっており、総合科目独特のシステムも諸刃の刀になりかねないのである。

○総合科目に望むもの

一番多かったのは、他の必修科目と時間割が重なる点をなんとかしてほしいという意見だった。確かに、二年次、三年次で取り直せばいいのかも知れないが、二年、三年と上がっていくとまた他の実験などが入ってきたりするため、なかなか希望する総合科目がとれないというのも事実である。この点はカリキュラムの問題ともからんでくるため、決定的な解決法はないのが実状ではないだろうか。他にも、ただ様々な立場の先生の講義を連ねるだけでなく、総括的な講義を何回かに一度入れてもらえると、講義全体の流れがよくつかめるのではないかという意見もあり、今後改善の余地を残している。

今回、三年生何人かにこうして意見・感想を聞いてみたわけであるが、総合科目をうまく活用している人、受動的にやり過ぎてしまった人、それぞれであった。確かに総合科目は必要最低四単位ではあるが、それにとらわれず、多くの科目を受講することによって、自分にとって未知の分野の知識を得ることも可能であるし、興味を広く持つこともできるはずである。一期に二回ほどの出席で優を取った人もいる総合科目ではあるが、それに甘えず、しっかり受講することによって得られるものは、幅広く、大きなプラスになることは間違いない。

(文責 小笠原弘明)

されていた。

この時期の特徴としては、総合コースは全て人文・社会・自然のいずれかの分野に属し、例えば

自然分野：天文学（総合コース）

といった形で実施されていたことが挙げられる。これは、大学設置基準が三分野に属さない一般教育科目を認めていなかったためである。講義内容はほとんど総合科目だったにも拘わらず、少々変則的な開設であった。総合科目として独立するのは、昭和46年度からである。

3 発展（昭和46年～）

昭和43、44年を頂点に、大学紛争の嵐が全国を吹き荒れた。その直接の起因はともかく、根源には大学教育、特に一般教育への強い不満があった。したがって、この紛争の結果行われた大学改革の力点が一般教育に置かれたのはごく自然のことであった。

各大学でも様々な改革が行われたが、全国的な改革は昭和45年8月の大学設置基準改正（実施は46年度から）である。一般教育の単位取得に関する条項が書き改められたため、人文・社会・自然の各分野にわたる総合科目の開設が容易になった。

広島大学ではこれに従って総合科目を独立させ、他の三分野と並立する一般教育の柱とした。同時に運営組織も独立させた。これまで学務委員会で扱われていたものを、新設の総合科目準備委員会が行うようになったのである。その他必要な予算措置も講じられ、広島大学における総合科目の基盤はここに定まった。そして昭和49年6月、総合科学部の創設に伴い、総合科目を含めた一般教育が教養から引きつがれて今に至っているのである。尚、蛇足ながら昭和47年に大学教育センターが広島大学に創設されたことを付記しておく。

(10ページにつづく)

他大学の総合科目

編集部

「他大学の総合科目」というテーマで分析記事を書くにあたり、まずお断りしておかなければならないのは、分析資料があまりにも古い（昭和51年度版）ことである。現在と比較すれば内容が異なっていることは十分推測できるが、資料収集の困難さをお考え合わせの上ご容赦願いたい。

	国立大学	内 訳		
		A	B	C
大 学 数 …… a	93	34	22	37
S.55年度総合科目を 開設する大学 …… b	51 (55%)	29 (85%)	12 (55%)	10 (27%)
総合科目を開設したこ とがある大学 …… c	3	1	1	1
S.56年度総合科目開 設予定の大学 …… d	1	0	0	1
計 b + c + d	55	30	13	12

A—教養(学)部を置く大学

B—教養(学)部を置かない2学部以上の大学

C—単科大学

総合科目の開設状況は、昭和55年現在で国立大学で55%（上表参照）である。私立大学は回答率が低く、数字としてつかみにくい。現在では、総合科目の意義がますます重視されていることから見て、開設率は非常に高くなっていると思われる。

独協医科大学 医学史、医学概論、医療制度、医学
(51年度) ラテン語、医学工学、医学物理学、
医事法制、生命論、人類生態学、人
類の遺伝、性と生殖、行動科学、発
育・成長・老化・環境と順応、発生
と分化、公害と環境汚染、情報科学、
文学、国際関係論

すぐに目につくのは、医科大学らしいテーマが並んでいることである。「生」にかかわる学問として、医学は専門分野に固執することなく大局的な目を持たなければならない。そういう意味で、医学大系はもとより、生命、人類といった大きなテーマの総合科目が設置されている意味は大きい。

福山大学 新しきものを創るには、現代青年の
(51年度) 生き方、万葉の恋（孤独）、外国語
選択科目 を学ぶ目的と習得の近道、アイン
シュタインの相対性理論とはどうい
うことか、人間の生き方、E・Cとは
何か、私の処世観、地球科学の第2
のルネッサンス、数概念の形成

各大学の総合科目の中では特にテーマが具体的である。とかく対象を大きくつかもうとして概論だけに終わってしまいがちなテーマに比べると、このような具体的なテーマを多角的に見ることがまた、「総合」の意味であることに気づかされる。

筑波大学 自然と文化、自然と人間、日本の自然、東アジアの自然と文化、人間と
(51年度) 社会、社会と経済、政策科学、環境
選択科目 汚染と法、資源と技術、情報と文化
物質・時間・空間、分子科学トピ
ックス、生活の中の花

筑波大学は割合早い時期から多くのテーマで総合科目を開設していた。昭和55年度調査では、A…学群ごとに教育目的に即して編成される比較的広域的な総合科目（24クラス）、B…学類ごとにその性格に応じて編成される比較的狭域的な総合科目（25クラス）、C…1年生の最初の学期に行う集中科目（63クラス）という結果が出ている。総合科目に特に力を入れていると言ってもよいだろう。

九州大学 アメリカの夢の再検討、アメリカの
(51年度) 社会と社会問題、アメリカの社会と
全学部1,2年 文化、戦後日本社会の諸相、部溶解
対象・選択科 放論、言語、ことばと文化、イメ
目 ジと人間、現代演劇、健康の科学、
科学と統計、自然とエネルギー

同志社大学 日本の近代化と同志社、現代社会と
(51年度) 宗教、生と死、現代とイメージ、京
全学部2年以 都の自然と文化、現代文明とアメリ
上、選択科目 カ社会、都市生活とスポーツ、公害、
環境と科学技術、エネルギー資源

桃山学院大学 産業構造論、都市計画、西欧思想史、
(51年度) キリスト教史、人間と宗教、同和教
全学対象、選 育論
択科目

このように、総合科目は少しずつ時代や地域、大学の特色を出しながら、主要な問題をカバーするように作られている。広島大学の総合科目の1つ、「戦争と平和に関する総合的考察」は外に例を見ない特色のある科目である。(ただし普通の講義として「戦争と平和」問題を扱っている大学は多い。)

＜総合科目における特別企画＞

ここでの特別企画とは、パネルディスカッション、ゼミナール、実験、実習、見学、映写、特別講義、担当者合同研究会などをいう。

パネルディスカッション—パネルディスカッションを行っている。(旭川医科大、富士大、東京理科大、東北学院大など) 総合科目は、原則として講義の形式で行うが、各担当者の最終時間はディスカッションの時間とする。質疑応答にとどまる。(香川大) 教官が集まりにくい。(山口大) 質問が出ない。低学年にはこの形式は少し無理。(神戸女学院大)

ゼミナール—ゼミナール実施。(横浜国大、立命館大、美作女子大、弘前大など) 受講生を20~30人に制限して行う。(神戸大) 教養部の現状から言って贅沢に思われ実行していない。(千葉大) 基礎教育科目として全学生必修。(淑徳大)

実験・実習—主として計算機実習。(岡山大) 科目によってフィールドワーク実施。(大阪市立大) 1年次に社会福祉施設見学を実施している。(淑徳大) 現在は聴講者が多く、実施が困難。(東京大)

見学—毎年、正倉院展を見学している。(奈良大) 総合科目第4「六甲山地」ではバスによる実地巡検が実行された。50年度以降は、企画されていない。(神戸大) 計画しているが受講生が多いため、回数は少ない。(橘女子大)

映写—映画などを行うことが多い。(山口大) 科目によっては映画会等実施。(大阪市立大)

担当者合同研究会—教師自身の準備のために、合同研究会を隔月に開催し、総合ゼミのテーマの深化、個別的テーマの確立、概念の明確化、各人の専門領域の相互交流のために現在なお継続中である。(長崎造船大)

以上、数例をあげたが、総合科目のマンネリ化を防ぐためにも特別企画を導入することは望ましいと思う。ただ、現状としては、1つの総合科目が多数の受講生を抱えているため、せいぜい視聴覚教材程度のものしか使用できない。総合科目にはやはり、コマ・カリキュラムを導入すべきではなからうか。各大学とも、テーマに工夫が見られる反面、有益な講義形態は確立していないように思われる。総合科目は存在意義が大きいゆえに実体化するのが難しい。それだけに将来どのような形で講義として根づかせるのか、研究・模索が要求されている。

(文責 内藤千恵美)

(8ページより)

4 現状と展望

総合科目が初めて開設されてから約30年、総合科目は大学教育の中に定着しつつある。昭和59年現在で開設している大学が193、総開設科目数721。様々な問題を抱えているとはいえ、その必要性が広く認識された証左であろう。

しかし総合科目は現状よりはるかに大きな可能性—それは同時に問題ともなる—を持つ。例えばなぜ1, 2年次にしか総合科目が開設されないのか。3, 4年次に開設してもよいのではないか。また、物理学なら物理学全体を統合するような、専門科目としての総合科目も可能ではないか。最終的に、全科学を網羅する真の総合科目は出来ないものなのか—。

空想、夢想はともかくとして、総合科目は今後確実に一般教育の中核となっていくであろう。それによって基礎教育科目と本来の一般教育科目を分離するかも知れない。いずれにしろまだその可能性が汲み尽くされたわけではなく、今後の発展に期待する所大である。

(この項 文責 青山幸樹)

総合科目の新たな展開のために

—学務委員会・総合科目小委員会の議論より—

好村 滋洋

1 はじめに

飛翔の編集委員より、昭和62年度の総合科目小委員長の私に、総合科目の反省や抱負について執筆を依頼された。総合科目は昭和44年の激しい大学紛争の中で生れた異色の授業科目である。当時学生達から投げかけられた問題は、何のための学問かということであった。これに答えるすべを知らなかった大学の先生達は「専門バカ」とののしられた。このような事態の反省の上立って、「専門的知識」の上にあぐらをかいていた先生達は学問の意義を考え直し、学問の総合的な視点を重視し始めた。このような反省の上立って「総合科目」のアイディアが出された。そしてまだ教養部時代の昭和46年に新しい授業科目として「総合科目」が開設され、すでに17年が経過した。その間に教養部は総合科学部に改組され、総合科目についての報告や反省も何度かなされている¹⁾。昭和60年度には、総合科学部になってからの10年の実績をふまえて、一般教育と専門教育にわたる全面的な見直しが臨時カリキュラム検討委員会によって開始された。この見直しの結果、授業科目の改良はすでに昭和62年度から実施されているが、議論が遅れたため総合科目だけが積み残しとなった。

学務委員会では、総合科目小委員会を中心にして昭和61年度（坪田博行小委員長）から見直しの議論を始め、昭和63年度から見直し実施を目指したが、昭和62年度の議論の結果、結論として、特に制度上の変更を行わないで、従来通り実施することとなった。しかしながら、その議論の中で出された問題点は、実施責任のある教官の側からも、受講する学生からも反省すべき重要なものがあった。

ここでは小委員会の議事録の中から、今後の総合科目の実施に当って参考と思われる内容を紹介し、関係する教官や学生のお役に立てたいと思う。ついでに、昭和59年度から62年度までの総合科目の題目と聴講者数の表を掲げておく。

総合科目聴講者数調

昭和59年度～昭和62年度

	59年度		60年度		61年度		62年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
カナダとアメリカ—その特質と諸相—	157	95						
戦争と平和に関する総合的考察	298	197	246	156	181	115	154	69
情報科学	162	50						
生命科学	93	51	122	82	102	81	101	73
人間と環境	262	182	233	178	208	157	369	162
ヨーロッパとは何か			91	89	106	109	118	114
創造とは何か			176	119	137	82	231	255
ミクロの科学					99	39	110	67
情報化時代における産業・技術・社会					61	26	106	49
現代の宇宙観					261			
現代の物質観							80	46

2 小委員会での議論

昭和61年度には、坪田小委員長の下で、昭和62年1月20日と62年2月17日の2度にわたり、詳細に総合科目の問題点が議論されたが、これらは議事録として昭和62年度に引継がれた。その内容は後の議論と重複するので、ここでは割愛する。昭和62年度になってから、6月9日と6月30日の2度にわたり議論が交わされた。その議事録の主な部分を集録する。

6月9日

前年度の議事録をもとに前年度委員会からの申し送り事項について検討した結果、以下のとおり意見がだされた。

なお、今回は問題提起にとどまり、次回の小委員会までに各委員で実情を把握し、具体的な内容、実施方法等を検討することとした。

1. 現在の総合科目の問題点について

a 評価（試験方法）について

- ・責任教官は単位の認定方法については非常に苦労している。
- ・毎回レポートを提出させている科目もあるが、学生の負担が大きすぎるものと思われる。
- ・各教官により授業の内容が違うので責任教官も評価がむずかしい。
- ・特定の講師の授業さえ出席すれば単位はとれるとの安易な見方がある。
- ・責任教官が毎回授業に出席し、各授業の終りの時間に学生とともにその内容について議論することにより、責任教官が試験問題を作成および採点できるのではない。

b 講義と講義のつながりを学生に理解させることについて

- ・毎回授業を担当する講師が違うので難しい

2. 分野内総合科目の開設について

総合科目は本来、時限立法的なものであるが、分野内総合科目を開設した場合にその科目を学部指定されるとやめられなくなるというおそれもある。

3. 開設される総合科目の数について

年々、増加の傾向にあるが、何コマ位が適当か検討の要がある。

4. その他

内容と形の問題があるが、最終的には学生にとって魅力的な授業と言えば内容が問題になってくと思う。内容に関しては各担当教官に任せるしかないが、この小委員会としては、総合科目の具体的な形式を各教官に提示し、その実現の可能性をさぐっていくこととした。

形としては、分野別総合科目と今までの総合科目の2つを用意してこれに技術的なものを加えていく方法が良いのではない。

1. 制度上の問題

分野内総合科目の開設について

- ・総合科目は本来、三分野のいずれにも属さない内容の授業を全学部教官の協力で作るという意図で開設されたものである。
- ・いわゆる分野内総合科目については、総合科目としてではなく、分野単位で新しい系（たとえば、総合系等）を作り、その中で分野内各系にまたがる科目を開設すれば「一般教育課程履修の暫定措置」を変更しなくても現行のまま実施できるものと思われる。

2. 授業内容の問題

サロンの雰囲気の中で自由に議論を交わせるような授業や、教官の指導の下に学生が調査、研究した結果を発表させるような授業を開設することについて

- ・受講者が少人数でしかも複数教官が担当し、毎回出席する授業が理想ではあるが、教官間の議論に学生がついてこれない傾向がある。
- ・受講者が少人数でなければ実施が困難であると思われるが、少人数クラスの授業を実施すれば、この形式ばかり増えるおそれがある。
- ・「一般教育課程履修の暫定措置」にある一般教育ゼミナールを各分野で開講することにより、提案の趣旨を活かした授業を行うことができる。

3. その他要望事項

学部によっては、必修科目等のために総合科目が受講しにくい状況があるので、一般教育の手引等で学生に指導する等学生が受講しやすいように配慮してもらおうよう要望することとした。

以上のような意見が出され、本小委員会としては、安易な制度等の変更ではなく、現在の総合科目の内容をさらに充実させるよう各担当教官が努力していくことが必要であるとの結論に至った。

3 おわりに

以上の議論を通じて言えることは、安易に制度の変更を行わなくても、実施責任者の創意工夫次第で総合科目の内容は、いくらでも改良できることである。勿論そのためには受講生の側からの能動的な取り組みの姿勢が大切であることは言うまでもない。従って、昭和63年度から総合科目の見直し実施に当たって、何らの制度上の変更を伴わないが、総合科目の設立の趣旨に立ち返り、内容の飛躍的な発展を祈らざるにはいられない。

幸い63年度から61年度小委員長の手により新しい総合科目「瀬戸内の文化と自然」が登場する。ここでは自然、社会、人文の三分野の融合した新しい試みが展開されるであろう。制度を動かすのも結局は人である。今後総合科目に次から次へと新しい創造的な試みが展開されることを期待して、筆をおく。

参考文献

- 1) 「メタセコイア」（総合科学部広報紙）No. 18, 1984年春季号 《特集》「総合科目をふりかえって」この特集の中の内山敬康先生の寄稿に、それ以前の総合科目に関する報告の文献がある。

6月30日

「総合科目に関する見直し案」について小委員長より次の提案があった。

1. 制度上の問題

- (1) 人文、社会、自然の三分野の枠外にある総合科目だけでなく、一ないし二分野の単位にカウントできる分野内総合科目も設ける。
- (2) 1セメスターで完結する2単位の総合科目を増やす。
- (3) 総合科目は学年進行に関係なく、いつでも受講して単位を取得することができるものとする。

2. 授業内容の問題

- (1) 各責任教官の個性を発揮したユニークな総合科目があってよい。教官名を冠して、通称「…ゼミ」と呼ばれてもよい。
- (2) 責任教官は自己の責任において他の担当教官に授業の分担を依頼し、実施してもよい。
- (3) サロンの雰囲気の中で自由に議論を交わせるような授業や、教官の指導の下に学生が調査、研究した結果を発表させるような授業があってもよい。
- (4) 学生の自主的な分析力、総合力、判断力、創造力を刺激し、それを育てるような授業を工夫する。

3. その他

- (1) 各学部的一般教育に対する卒業要件を極力ゆるめ、少なくすることが望ましい。
- (2) 西条への早期移転が、総合科目の柔軟な実施のためにも特に望まれる。

上の案を検討した結果、以下のとおり意見がだされた。

特集の終わりに 一学生の意見から

大雑把に、それも駆け足で「総合科目」に関する事柄を追ってきた。これ以外にも、62年度の総合科目の受講生の皆さんに、その授業を受けての感想・意見を書いてもらったものがある。最後に、まとめというわけではないが、その感想・意見に見られる総合科目に対するいくつかの考え方について触れてみたい。

▷総合科目は意義深い

1つの大きなテーマの下で、毎回違った教官がいろいろな視点から話をしてくれる。自然科学系の総合科目だと、それが最先端のことだったりして、非常に興味深い——多くの学生がこんなことを書いている。知識の提供だけでなく、多くの教官に出会えることが総合科目のメリットだ、という。しかし決して少なくない学生が、はっきりと「あたりはずれがある」と言っている。興味があれば結構楽しめるが、それ以外の時は苦痛、という学生と、全体を通して関心を持続させる学生との間に、さて長くて深いミゾがあるのかどうか。ある意味で「広く浅く」を目指す総合科目、こんな見方もあるんだな、と思わせればしめたもの？

▷消化不良

いろんなことを詰め込みたいのはわかる。しかし限られた時間にあれもこれもというのでは、教官・学生どちらにも物足りなさが残るのでは？という意見。もう少し1人の教官の担当時間を増やしたらいい、と考えている人がかなりあった。教官が変わる毎に1つでもいいから何か確かなものを得たい、と訴える学生達。教官はもっとわかりやすい講義をして！との声を、単なる学生の努力不足と片付けるかどうかは難しいところである。

▷一般か専門か

自然科学系の総合科目の場合、専門的すぎて理解できない、という意見がちらほら。科目によっては専門課程に入る下準備の意味合いが強いものもあるので、何となく受講した学生にはつらいところ。逆に、知ってることばかりで退屈、もっと領域を拓げて目新しいことを教えて欲しい、という人も。それぞれの総合科目で、意図するところが異なっているために生じる悲劇と言えようか。

▷一貫性

「もう少し全体としてのまとまりがあってもよいのではないか」この表現に何度も何度も出くわした。特定の科目ではない。今期開講された総合科目全部で、である。総合科目について何かを語ろうとするとき、必ず出てくる問題の1つであろう。こうした意見の出る背景には、例えば、「教官が変わる度に前とは全く関連のない話になってしまう」とか「内容が重複している」ということがある。最後まで受けても、結局「何だかよくわからなかった」との意見。総合科目なんだから“総合”してよ！と不平の1つも言いたくなるというわけ。これに対して“総合”なんてものは学生が各自でやるものだ、との反論もあろう。しかしながらそれ以前に、総合科目を担当している教官方間で講義をするにあたっての綿密な打ち合わせが不足している事実も指摘されるべきであろう。

難しいのは嫌、負担がありすぎるのも困る、だからといって単なる寄せ集めのつまらないのも受けたくないし…。ほどほどに内容が理解でき、適当に知的好奇心を満たしてくれる、手頃な総合科目のパッケージ、ないかな——この辺が学生の本音ではないかといったら穿ち過ぎか。

(文責 藤本貴子)

大内 侃



総科ができてから長い間、就職委員会の委員や委員長をやったので、思い出すことを書いてみよう。1～2回生の就職は、総合科学部という名前だけで実状が分からないので、大変だった。幸いにも旧制広島高校同窓会の絶大なご援助を受けて学生の就職問題も無事に切り抜けた。心から感謝しております。

あるマスコミ志望の学生、教社の訪問で失敗して悲観、最後にもう一度面接に行くように助言し、一方、同窓会に連絡した結果、運動部の主将であった事を見込まれて内定を得た。また民放を志望して失敗した学生は、卒業後1年間その放送局でアルバイトをし翌年には見事に就職した。マスコミ関係に就職するのは難しいものである。次はある物理学専攻の学生の話。彼の試験の答案を見ると、基本の式は書いてあり答も正しい。良い成績のようだ。NHKの面白ゼミナールの先生のまねをして、私も特に正しい答にはボーナス点を与えることにしている。

(あいまいな事柄を多く知ることより、正しい知識を少しずつでも積重ねる方が将来性があろうという理屈だ) その視点から答案を再検討したら、どの答にも重要な点が抜けているのに気付いた。学生を呼び出して聞いたら、案の定、全く分っていなかったのである。そして卒論を書く一年間は一生懸命に勉強させられたからか大手企業に就職できた。ボーナス点を与えるのは良さそうである。最近の学生は教科書を丸暗記して解答する者がかなりいるが、その対策を明かすわけにはいかない。そんな答案にはボーナス点だけ減点したい気持になる。

宮城君(厚生補導係)がワープロから打出したデータを見ると、あと4～5年たつと総科を指定校扱いにしてくれる企業がでると予想をしている。

御専門は素粒子物理学です。東京大学を卒業された後、昭和21年から広島市立工業専門学校で教鞭をとられ、その後広島高等学校を経て昭和24年から広島大学皆実分校の教壇に立たれました。以後今日に至るまで約40年にわたって学生達に物理学を教えて来られました。この間、昭和32年には理学博士号を取られています。また、就職委員長として学部発足当初より学生の就職に力を尽くされました。

小此木 久一郎



私がこの大学にきてから早いもので二十年になろうとしています。愛知大学という愛知県の私学から国立大学の広島大学に移った時には給料が少なくなっておどろいたのも、ずいぶん昔のような気がします。広島という土地は気候がよくて僕にとってはとても住みよいところでした。その上、教職員の皆さんがとても親切にしてくださったので、僕のように能力の十分でない者でもあまり失敗しないで毎日が送れたのだと本当に感謝いたして居ります。僕の専門の研究分野である素粒子論も、一時にくらべると進歩がおそくて、世界的にも停滞しているように見受けられます。僕がこの大学に来て間もなく、大学紛争が激しくなり、僕は組織委員長をさせられていたりして、なかなか大変でした。事務長さんなどと僕としては比較的熱心にその仕事をしたりした事も、なつかしく思い出されます。

僕も停年になったら再就職をしたいのですが、広島出身ではありませんので、顔がきかなくて、自分の再就職のめどもたっていません。助手諸君のために良いポストを世話するようなことも思い通りにはなかなかいかなくて、もうしわけなく思っています。教職員の皆様、どうか今後とも御元気で御活躍されることをお祈りします。

御専門は素粒子物理学です。名古屋大学大学院を修了された後、まず昭和31年から愛知大学で教鞭をとられ10年余りを過ごされました。この間、理学博士号を取られています。昭和42年から広島大学教養部で教壇に立たれ以来20年にわたって研究と教育に精進して来られました。

「なぜ資格をとるのか」

編集部

「資格熱」などという言葉がささやかれ出したのはいつのことだろう。以下は、総科生が取れる資格、総科生の持っている資格について、アンケートなどをもとにした報告である。

◎教職について

教育職員免許状は、総合科学部において取得し得る最もポピュラーな資格である。しかし教職への道は学生の想像する以上に険しそうだ。

教育職員免許状取得に必要な教科及び単位は、

1年次(要望)	
日本国憲法	2単位
哲学もしくは倫理学	2単位
2年次	
教育原理(教育原理Ⅰ)	2単位
教育課程論(Ⅱ)	2単位
教育心理学	2単位
3年次	
青年心理学	2単位
道德教育の研究	2単位
教育学概論	4単位
4年次	
教育実習	2単位
各教科の専門科目	
甲(社会、理科)	計40単位
乙(国語、数学、外国語)	計32単位

であり、これに要望の同和教育(2単位)を加えると、計62単位もしくは54単位となる。このうち所謂“教職科目”は、2、3、4年次の項目に取り上げた教育原理、教育課程論、教育心理学、青年心理学、道德教育の研究、教育学概論、教育実習の7教科16単位であり、これらは卒業単位にカウントされない。これを専門科目と両立させるのが学生にとっ

て相当の負担となる事は想像に難くない。

事実、今年卒業の59生を例にとると、2年次に教育原理を履習した学生は70人程度であったものが、3年次において教育学概論を受けた学生は40台へ減少し、4年次に教育実習で福山へ行った者40名、教員採用試験を受けた者8、もしくは9名、実際に教師になった者はわずか7名であった。

しかし、現実問題として学生に負担となるのは教育実習までであり、そこまで苦勞しておきながら採用試験に臨んで5分の1程度に激減してしまう理由は説明できない。この辺りは学生の教職に対する意識に根ざすものようである。

編集部が1月末に実施したアンケートによると、62生の回答者43人中3分の1に当る13名が教職を取りたいと答えている。しかしこの内8人までが、“教師にはなりたくない”といい、又教職を希望する理由として9人が“とにかく資格が欲しい”という意味の事を挙げている。

61生の回答者は28人であり、8名が教職を希望、内3名が教員にはなりたくないと答え、5名は希望する理由は特にないと答えている。又、過大な負担のため教職を断念した者7名がおり、教職を現在希望する者8名という数字を考えると、2年後期で既に希望者が半減している事になる。しかし61生においては、“先生になりたいから”教職を取る人が教職希望者の半数、4名みられた。62生では13人中1人しかいなかったのだ。

60生の総回答数は11、内訳は教職希望者7名、希望しない者4名であり、比率としては逆転している。しかし教職希望者の消極的意見は61生、62生と共通して見られた。

59生は回答者数4人、内1名が教職を取得済みであった。

アンケートを集計してみて驚いたのは、“取れるもんなら何でも取っとこう”といった発想が教職希望者の間に蔓延していた事である。教職希望者の実に7割もの人が希望の理由としてこれを挙げているのだ。

この消極的、日和見的態度を示した者は、ほぼ例外なく教師になるつもりはないと答えている。理由

としては、仕事がつらいというものが主であった。

資格は欲しいが教師は嫌だ——こんな考えで3年もの間、教職単位を取り続けているのかと思うと、何やら空恐しい。反面、たかだかこんな理由で3年も苦勞しているのかと思うと感心してしまう。就職に対する不安、就職に役立つ資格に対する要求はこんな形で表面化していたのだ。

しかし前述した通り、かなりの者が教職を途中で断念している。専門科目が気になり始め、教職科目を現実受講してみた2年前期に脱落したという回答が最も多かったが、62生の中に1年前期に早くもあきらめた者が6名もいたのは意外だった。学生側からは、教職科目はつらい、教師になるのに不要な科目もある、との反応を得た。

無論、いい加減な連中を教育者にする訳にはいかない、という考えは分かるのだが、教育職員免許を手にする者の内、実は8割以上が“いい加減な連中”である事を思うと、教免取得のハードさは、ふるい分けとして大して役に立っていないようである。

今回調べてみて、学校側の制度と学生側の態度とのギャップを痛切に感じた。学生は就職に対する、いってみれば“すべり止め”の発想で教職へと走っているようだ。

しかし現実問題として企業その他の就職にあぶれて教員となる例がまずいない事を考えに入れると、教師になる気なくして教職を取るのは時間と労力の単なる浪費と言える。

教職を志す学生の方々、御一考を。

◎司書・学芸員について

1. 司書

司書とは、図書館の専門的事務に従事する職員のことである。司書の資格を取得するには、毎年夏に行われる司書講習を受講しなくてはならないが、総合科学部でもごく少数ながら例年この資格の取得者が出ている。(ただし、学務の記録に残らないため、正確に人数等は不明である。)

司書講習は文部大臣の委嘱を受けた一定の大学でのみ開講されるため、広大生は可部の広島文教女子大学まで受講しに出かけなくてはならない。また、司書の雇用数も少ないこととあまって、総科内では、司書を目指して司書の資格を取得しようという学生は殆んどいないと思われる。

司書講習については、下記の様な規定がある(図書館法施行規則による)。

受講資格 大学に2年以上在学し、62単位以上修得した者

期間 (S. 62) 7月14日～9月4日
(日曜・お盆を除く毎日、9:10～17:15 午前2限、午後3限)

費用 (S. 62) 受講料65,000円
教材・資料費 4,000円

講習科目

	科 目	単 位	
甲 群	図書館通論	2	
	図書館資料論	2	
	参考業務	2	
	参考業務演習	1	
	資料目録法	2	
	資料目録法演習	1	
	資料分類法	2	
	資料分類法演習	1	
	図書館活動	2	
乙 群	青少年の読書と資料	1	
	情報管理	1	
丙 群	社会教育	} ④※	1
	視聴覚教育		1
	人文科学及び社会科学の書誌解題	} ⑤※	1
	自然科学と技術の書誌解題		1

※甲群・乙群とも必修。

※丙群のうち④、⑤から各1科目ずつ選択必修(以上は文教女子大の規定による)。

※各科目で4/5以上の出席と成績考査により単位が取得できる。

2. 学芸員

総合科学部では、昭和63年度から博物館に関する授業科目を新たに開設する。これにより以前は取得できなかった学芸員となる資格が取得可能となる。

これは、近年とくに全国的に美術館や各種の博物館の新設、充実化の機運が高まっており、専門的知識を備えた職員(学芸員)の必要性が叫ばれていることを考慮したものである。

尚、学芸員となる資格に関する規定は、次のとおりである。

有資格者 学士の称号を有する者で、大学において文部省令で定める博物館に関する科目の単位を修得した者
(博物館法第5条)

博物館に関する科目(博物館法施行規則より)

- | | |
|------------|------|
| (1) 博物館学 | 4 単位 |
| (2) 教育原理 | 1 単位 |
| (3) 社会教育概論 | 1 単位 |
| (4) 視聴覚教育 | 1 単位 |
| (5) 博物館実習 | 3 単位 |

※ (1)は総科・文、(2)~(4)は教育、(5)は総科・文で開講。

※ 科目については、講義題目と異なる場合があるので昭和63年度講義概要を参照してください。

ところで、地方公共団体の美術館あるいは博物館の学芸員採用試験にあっては、学芸員資格のための単位修得証明書の提出が必須条件になっている。単位を修得した者には、総合科学部で発行する。

学芸員となる資格をもっておけば博物館のみならず、市や県の教育委員会などでもさまざまな活動分野がある。しかし、現在のところ「学芸員」としての雇用の絶対数は少なく、真に学芸員を目指す者にとっては、道は長く険しいと言わねばなるまい。

(国公立博物館の場合、役所に勤めながら学芸員に欠員が生じるのを待つというケースが多いらしい。)

司書と学芸員、ともに雇用機会の少ない職種ではあるが、これらを志す諸君はどうか気を落とさないでいただきたい。少なくとも、資格は可能性の一部を形づくるものには違いないのだから。

◎総科生と資格

資格と一言で言ってもその種類は多々ある。「なぜ資格をとるのか」。この素朴な疑問を、今度は先日おこなったアンケートをもとに、総科生の持つ資格の実態から考えてみようと思う。

アンケートの集計結果をみて、気付いたことは次のとおりである。

1. 取得資格に個人の違いがあまりみられない(表1参照)。
2. 取得理由は大きく分けて、“自分の意志から”と“人に言われて”の2つである。(ただし前者には必要性から取得したものと、趣味と実用を兼ね合わせたものがある)
3. 今後取得を希望している資格についても、あまり個人差がない(表2参照)。しかし理由については、将来のことを考えるという要素が加わっているようである。
4. 就職との兼ね合いでは、特に決めた職種はないが、資格を持っていると有利だからという意見、次いで、せっかく大学に通っているのだから……という意見が多く、職種を特に気にしている人は少ない。

(表1)

	主な取得資格名
1 年	英検(準1級~4級)・運転免許・珠算 武道・書道・アマチュア無線
2 年	英検(準1級~3級)・運転免許・珠算 アマチュア無線
3・4 年	英検(準1級~4級)・運転免許・珠算 語学検定・アマチュア無線・情報処理技術者

表1は、各学年別に総科生が取得している主な資格をまとめたものであるが、一見して判るように学年ごとに大差がない。しかしここで重要な点は、表2とも比較すれば一目瞭然であるように、英検と運転免許が断然高い人気を誇っているということである。即ち、この2つの資格は大学生として取得して当たり前になりつつある、と言っていいだろう。割合でも、資格所持者あるいは取得希望者を合わせると、それぞれ英検と運転免許について、1年生(52%、49%)2年生(50%、61%)3・4年生(64%、86%)となっている。

その次に多かったのは珠算であるが、これには小さい時に取られたという人と、算数(数学)が出来るようになるためにという人の2通りのケースがあるようだ。今後取りたい資格にこれを挙げた人は

さすがにいなかった。

その他のところでは、国連英検・将棋・エレクトーン・ヨット・マイコン検定、あるいは着物の気付け、水難救助員、計算尺など様々であったが、思った程特色のある資格所持者がいなかったという印象を受けた。

(表2)

	主な取得希望資格名
1年	英検(1級~2級)・運転免許 情報処理技術者・教職・司書・秘書検定
2年	英検(1級~2級)・運転免許 情報処理技術者・教職・旅行業務取扱主任
3・4年	英検・教職・学芸員・運転免許 情報処理技術者・司書

次に、取得理由については、自分の意志から「将来必要だと思った」「クラブ・サークルに関連して」「せっかく学んだので(語学検定など)」「何も資格を持っていなかったから」取った、あるいは「就職に有利」「職業選択の幅を広げるため」というのが一般的だ。

資格には「スペシャリストとして取る資格」と、「持っておけば有利だから取る資格」とがある。後者に高い人気があるのは言うまでもないが、では資格を持つことが本当に就職において有利となるのかどうか、実のところ明確なデータはない。つまり、「就職」という一大事を控えた「不安」のようなぼんやりしたものが、今の大学生に資格を取らせている原因だともいうべきであろうか。

だが、もしそれが本当だとしても、私達は決して無意味なことをしているのではない。(無論、「資格」と「実力」との差異はいろいろと問題になるようではあるが。)なぜなら私達の努力が、「ただ資格を取るためのだけの努力」に終わりさえしなければ、それは私達の血となり肉となるのであろうから。

文責 桑原 秀行
宮尾 佳道
伊藤多喜子

退官の言葉

去ることば

田淵 實貴男



たとえば、日和ということば。つい最近、文庫本の短篇のなかで出合ったことばだが、この美しい日本語ももう廃語にちかいかないと、ふと考えた。子供のころにはごく普通に使われていたような記憶がある。「狐の嫁入り」「そばえ」などといったことばも浮かんで来た。こんなことばもふだんの会話では聞かれなくなっている。その稗史的なひびきが仇となっているのだろうか。季節になると時たま耳にするのは「時雨」ぐらい。

巨大な網のつなぎ目から少しづつ振りはなされ、こぼれ落ちて行くことば。あたらしく生まれ、群のなかにはいりこむことば。そうして世代から世代へゆっくりと流れて来たことばの総体——。時代の変化に合わせた激しい代謝があって、いまはパロディ気分がことばを択んでいるかのようだ。

たとえば、「ベスト・セラー」。戦後に生まれ、かなりの古株になったことばの一つだが、ある時期までベスト・セラーというのは自然発生的な、つまり偶然の結果だったのではあるまいか。いつかベスト・セラーづくりが行われるようになって、このごろは、ある日突然何百万部という本が出現しても、世間はさほど気にとめなくなった。しかし、そうしている間にも——比喩として言うのだが——一握りのベスト・セラーづくりの頭脳が時代のある空気を作り出しているとしたら、少しぐらい背筋が寒くなくてもよいのではなからうか。そういえば、こないだ読んだ文庫本だって……。

——退職のご挨拶がきいたふうな話にそれってしまった。パロディは性に合わないので仕方がない。

御専門は言語表現論(英語)です。京都帝大から東京大学大学院に進まれ、そこを終えられた後、しばらく愛媛県で中学や高校の先生をしておられました。昭和32年から広島大学教育学部附属高校で教鞭をとられ、その後昭和34年に皆実分校に移られました。以来今日まで、学生に英語の何たるかを教えてこられました。

当世 コース選択事情

編集部

言うまでもなく、総合科学部の大きな特徴の一つは、入学後に自分の好きなコース（試験のときの文系、理系にかかわらず）を選択できることである。しかし、逆に言えば入学して一年後には必ずいずれかのコースを選ばねばならないわけであり、そこには様々な思惑が交錯する（場合もある）。それでは新2年生のコース選択はいかに。

まずは、何故そのコースを選んだかという動機について述べてみよう。大多数の人は当然の如く自分の興味や関心を基準にコースを選択している。いくらよく遊ぶとはいってもそこはやはり大学生である。皆それぞれ自分はそのコースでどんなことをやりたいか、何を求めているかなど自分なりにまじめに考えているようだ。次なる動機はやはり就職であろう。いくら自分が関心があるといってもコースを選択する際に「その先」のことを多少なりとも考えない人はいないと思う。就職にはその時代の色が反映するのは事実であり、コースの選択に際しても時代の色が反映するのは当然と言えよう。しかしだからといって、就職がコース選択の際の基準の全てと考えている人はほとんどいないと思う。やはり自分の興味や関心が中心にあり、それに就職のことが、人それぞれに微妙にからんでくることになる。

以上が主な動機だが、他には、自分は文系の科目は全く不得意で、数学しか、あるいは物理しか出来ないから、であるとか、他に面白そうなコースが無いので、とりあえずこのコースを選んだ、などという、どちらかといえば消極的な意見もあった。ちなみに、この新2年生から、総合科学部の制度が7コースとして実際に動き始める。従来に比べればコースの数は増えたわけであるが、その事実がコース選択の上で多少なりとも影響を及ぼしたかというところでもない。何故なら新2年生（62年度入学生）は受験の段階で7コースになることを知っていたはずであるから、ある程度の目算を持って入ってきたからである。確かに選択の幅は広がったが、自分が何をやりたいかはっきりしていれば問題はないようだ。

では、コースを選ぶにあたって、自分が進むコー

スについての知識をどれだけ持っているか、ということになると、いささか不安が残る。つまり、程度の差はあれ、「あのコースに行ったらたぶんこんなことをやるんじゃない。」というのが正直な所。もちろんコースについて知る機会がない訳ではない。

昨年の10月に行われた沼田研修は、コースについて知るよい機会であったようだ。教官と身近に話ができ、同じコースへ進もうとする他の人の話も聞け、コース選択の際の参考になったと思う。他には資料を閲覧出来る場所も設けられ、中でも卒論のテーマや教官の現在の研究テーマについての資料には多くの関心が寄せられた。これはいかに学生がコースについての具体的な情報を求めているかをよく示している。

もちろん他にもコースについて知る手段は幾らでもある。直接、教官の研究室を訪問して話を聞くのも良いであろう。特別忙しくない限り、快く話して下さるはずだ。ただし先輩に話を聞くことに関しては、この春より7コース制が実働するために新2年生は多少難しかったかもしれない。とすれば63生はまだ幸せ者である。

次に難しいのは第二・第三志望をどうするか、である。これは人によってかなり違ってくる。文系には生きたくないという理系の人間もいるし、第一志望以外に自分の行くコースはないという人間もいる。これならまあ許せるというコースをすべり止めにする人も少なくない。

いずれにせよ第二・第三志望も自分の意志で決めるわけであるから、慎重に決めようが適当に決めようがそれはそれがかまわないのではないだろうか。

入学してからコース志望届けを出すまでの10カ月間は人それぞれ考えることも多い。その10カ月を過ごした上で、今までどおりのコースにする人もいれば、紆余曲折の末決定する人もいる。と考えるならば、そのモラトリアム（10カ月）をどう過ごすかコース決定に多少なりともかかわってくるのである。

（文責 海住 隆雄）

〈コース・ガイダンス〉

新入生の皆さんの中には、既に志望コースを決定して入学した人も居るかもしれない。あるいは未決の人も当然居るだろう。その様な皆さんの進路の決定を助けるべく、学部側はいくつかのコース・ガイダンスを用意している。

先ず入学式の翌日に、大講義室で各コースの教官によってコースの概略についての解説が行われる。最初は文理合同で、各コースの大雑把な解説や、授業や単位の取り方についての注意すべき点の解説が行われる。次に文系コースと理系コースの解説を文理別に分かれて先の文理合同の解説よりももう少しわしく行う。

教官によるオリエンテーションと共に、学生によるオリエンテーションも行われる。既に大学ずれた先輩方が、学生から見た各コースの状況や、授業のくみ方、果てはどこの食堂が美味しいか、と云うこと迄教えて下さるといふ企画である。教官によるオリエンテーションの時に、授業の組み方が理解出来なかった人も、ここでは理解出来るであろう。

この入学時のオリエンテーションが終わった後、9月の志望調査前のガイダンスまでは暫くの間特にコース・ガイダンスと言うべきものはない。だがこの期間は大学に合格するという目標もなくなり、大きな虚脱感がやってくる時期である（人によって差はあるだろうが）。しかし、その一方で、自らの今迄の生き方を反省し、更には自分は今からどう生きるべきか、等ということを落ちついて考えることの出来る良い機会である。コースについて、将来の勉強について、また就職についての問題などわからない点があったら、学生相談室や教官の研究室などに出かけて行って、自分の疑問や悩みを積極的にぶつけてみるべきである（ただし学生相談室で相談をうける時には先約が必要である）。

さて前期末の9月には、再びコースガイダンスが行われる。これは4月の入学時に行われたガイダンスと内容的には大差がないが、後述する「コース志望予備調査」のイントロダクションとして、各コースの大雑把な内容を確認するという意味はある。

その後9月末に、「コース志望予備調査」が行われる。これは9月の段階に於ける各コースの志望状

況を調べるものである。1年生は調査用紙に自らの志望コースを記入し、9月30日迄に学務第一係に提出せねばならない。結果は後期の初めに提示される。この調査の結果を見ることにより、どのコースや群に人気が集中しているか、又どのコースや群には余裕があるか、などということがわかる。この結果もコース選択の資料として重要であるので是非見ていただきたい。もっとも、この調査結果の数字にとらわれて自分の本当に行きたいコースをあきらめてしまふようなことはして欲しくない。

コース志望調査の結果が発表された後しばらくすると、今度は総科の1年生だけによる合宿研修が行われる（昨年は10月24・25の両日に、広島工大沼田校舎で行われた）。これは言わばコースガイダンスの拡大版とも言うべきもので、抽象的かつ一般的な言葉によるコースの解説ではなく、それぞれのコースではどのようなことが学べるか、また教官はどのような研究を行っているか、卒論のテーマや就職の状況など、学生が本当に知りたいと思っている各コースの具体的な状況を知ることを目的としている。なおこの合宿研修の立案・企画・運営は全て1年生有志の委員の手によって行われる。今年もより1年生自身のためになる合宿研修を創っていただきたい。そのためには上級生も教官も協力を惜しまないであろう。

その後年が明けるといよいよ自分の志望コースを決定する時期が来る。2月に志望コース届を提出する直前（1月）に最後のコースガイダンスが行われる。これは殆んど今迄のガイダンスの内容を敷衍するだけであるが、今迄聞き逃していたようなことが説明されるかもしれないので注意しておこう。

以上でコースガイダンスについての解説は終りである。1年生のみなさんが、総科の中で本当に自分のやりたいことを発見されることを願いつつこの稿を終わる。

（文責 戸敷 聡）